



## 学園史編纂委員会事務局合宿

3月6日(木)～7日(金)一泊二日で休暇村で合宿をし、近江兄弟社の先輩から聞き取り調査をしました。また、同時に、メンバーが担当する報告と検討のときを持ちました。以下にその概要を掲載します。また、メンバー担当のテーマを何回かに分けて掲載します。

橋本茂樹さんの証言を聞いて

2014.3.6

## 近江兄弟社の思い出 激動の半世紀



橋本茂樹さんは、大正12年生まれ、91歳、ご高齢にもかかわらずご夫人とともに途中に休憩をはさんだものの3時間を越えてお話をいただきました。まずその熱意に編纂委員一同は感動をおぼえました。

橋本さんは戦前・戦後の近江兄弟社(株式会社)をよく知っておられる今や貴重な存在です。特に株式会社の倒産(会社整理)の時は工場長として会社の整理・再建にあたられ、その時のお話はお聞きしているわれわれにも万感胸にせまるものがありました。

\*\*\*\*\*

## ヴォーリズさんの思い出

ヴォーリズさんとの出会いは昭和14(1939)年、『湖畔の声』で社員募集があり、応募のため近江八幡に来たのが最初であった。ヴォーリズさんがいきなり「手相を見ましょう」といってくださった。その頃の近江八幡は駅を降りると本当にさびしい所であんなさびしい所に行きたくないと思っていた。ヴォーリズさんが最初に八幡に来られた時のさびしさが想像できた。しかし、その後も入社のお誘いがあり入社することになった。

最初は建築部に所属し各地で勤務した。東京事務所にはいたころの思い出としてはヴォーリズさんは社員には大変さびしい方で、先生と呼ばれることがお嫌いだった。ある時「メレル先生」とお声をかけたら「先生はどこにいますか」ときびしく言い返されました。また掃除にも大変さびしい方でヴォーリズさんが東京事務所にこられるときは窓の棧のすみずみまで拭きあげなければならなかった。

昭和16(1941)年、ヴォーリズさんが日本に帰化された時は心から喜んでおられた。東京事務所に来られた時、泊まっておられた山王ホテルから地下鉄に乗ら

れた時、電車の中で誰彼かまわず「私は日本人になりました」と声をかけてまわられた。当時は戦時体制が色濃くなりはじめた時で欧米人に対する反感が強くなっていた時期だった。私をはじめまわりの者がハラハラさせられたものだった。戦時下ではヴォーリズさんにスパイの疑いがかかり近江兄弟社の屋上から米軍機に合図を送っているとの疑いで憲兵が近江兄弟社に乗り込んできたこともあった。

## 命がけの転勤

### 戦時下に上海事務所に転勤を命じられる

戦争がはじまると上海支店転勤を命じられた。その頃は長崎港から上海へ行くのが最も速かったが、アメリカの潜水艦が出没し危険だということで、敦賀港から日本海を渡り、今の北朝鮮の清津の港をめざした。清津から図門という所に行き、中国に入ることになった。図門では中国の官憲に捕らえられ、列車を降りるように言われたが同乗していた日本の軍属の人からここで降りた者は一人も帰ってこなかったから絶対に降りてはいけないといわれたので、降りないで何とか北京にたどりつけた。その後北京から南京・蘇州を経て上海に着くことができた。

近江兄弟社の上海支店はフランス租界にあった。しかし、上海で現地召集され市街戦をやる準備をさせられた。任務は軍馬を輸送する役だった。馬のエサにするために中国人の作ったコウリヤンを刈り取り略奪した。やがて敗戦をむかえ武装解除させられた。上海は蒋介石の国民党軍が支配していた。蒋介石と側近がクリスチャンだったので彼らは「暴をもって暴に報いるなかれ」という考えで日本人に接し、上海の日本人は無事だった。蒋介石には感謝している。昭和26(1946)年によく帰国できた。

## 戦後の近江兄弟社

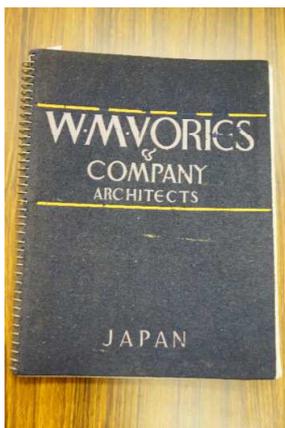
日本にもどってしばらくはYMCAの屋根裏部屋に住んだ。それから武佐教会・多賀寮などに転居した。戦後の近江兄弟社



は戦前ほどの高給は出せず、給料も安くなった。近江兄弟社で給与規定を作ろうとなった時、ヴォーリズさんは「兄弟社に規則はいりません」と叫んでおられた。戦前の近江兄弟社はヴォーリズさんは伝道、吉田悦蔵さんは商売、村田幸一郎さんは建築という役割がうまく働いていたが、吉田さん村田さんが亡くなり、ヴォーリズさんが亡くなられてからの近江兄弟社は、メンソレータムのジョージハイド社と組んで暗躍しようとする重役が出たり、東京オリンピックをひかえての事業に参入するという詐欺事件にまきこまれたりと社内の協力体制・財政状況ともに徐々に悪くなっていった。そしてつい

に倒産(会社整理)をむかえることになった。私はその時の工場長だった。その時のことを思うと、ヴォーリズさんに申し訳なく痛恨の思いである。会社整理から会社の再建に必死で取り組んだ。倒産の時、保全命令の出ている会社の商品を總會屋から守ってくれたのは近江八幡警察の警察官であった。地域に支えられていることを感じた。その時の話をし出せばキリがないが、一つお話しておきたいのは今のメンタームのキッズマークが生まれたいきさつである。メンソレータムのナースのデザインを担当された居間竹七郎さんという著名なデザイナーがこの時も非常な協力をしていただいた。何とかナースの商標を残したいと思っていたが、それは法的に使えないということだったので現在のキッズのデザインをしていただいた。私のせめてもの責任の一端をはせたと考えている。

\*\*\*\*\*



最初に、橋本茂樹さんから学園史編纂室に素晴らしいプレゼントをいただきました。それは昭和 11(1936)年発行のヴォーリズ建築写真集でした。戦前のヴォーリズ建築が国内・国外ともに網羅され史的価値が高く、写真も上質で保存状態も良く、学園史編纂室の一級史料となるべきものだと思います。橋本さんに厚く感謝申し上げますとともに大切に活用してゆきたいと思っています。

## 学園教育のルーツを探る

(その1) 発題者 檜山 秋彦

はじめに

近江兄弟社のルーツは一柳米来留・ヴォーリズ、満喜子夫妻である。

近江兄弟社学園教育のルーツは一柳米来留・ヴォーリズの教育に関する思想と行動を分析する事からはじめなければならない。

一柳米来留・ヴォーリズの教育に関する思想と行動を分析する最初の試みは彼の自叙伝を分析する事でなければならない。

### (1)「失敗者の自叙伝」にみる米来留の教育思想

(a)学校時代の米来留が受けた教育的感化

⑦「私の少年時代を形成してくれた影響」＝「異常な自然現象との息詰るような接触」、「大自然の雄大な光景」「清澄な乾燥した大気」「壮麗な日没の光景」(P.49)「こうした大自然との経験は、私が後年受けた学校教育にくらべて、確かにまさるとも劣ることのない教育的要素であったことは、少しも疑わない」(P.50)「少年時代に、私をとりまいていた雄大な大自然」は「ほんとうに私の教育のためには、測り知れない重要な要素となったのである」(P.50)＝「自然の教育力」

⑧「水中に浮かぶことを覚えた感激の経験」＝「外見上むずかしいと思われることでも、はじめにそれはできると信ずることであり、次には、実際その経験を持っている人を、疑わずに信じて、

その指導に従えば、きっとそれができるということである。」「楽器を練習するにも、外国語を習得するにも、これはまちがいのない事実である。」

(P.55～56)＝「体験の教育」

⑨「両親の責任」＝「およそ普通の幼な子であれば、だれにかぎらず、すばらしい有能な二人の奴隷がいてくれて、いつも自分の願いを予知し、その必要を満たしてくれる。そういう便利な存在のいることを感じながら、その生涯をはじめるのである。この親とよぶ奴隷の便利さは、徐々に幼な子の心の中に感謝の念となり、ひいては愛情となり、そこから出発して、自分も親のために尽くしたいと願うようになる。」(P.56)「両親が私の性格や経歴にのこして下さった直接の感化として、私は、いくつかのはっきりとした要素を、容易に父と母の両方に尋ねて行くことができる。「母は…わが子が宣教師になって、母の若き日の夢を実現してくれるようにと、妊娠中祈りつづけていた…。また母は若いとき絵が好きであった。私の小さいころ、母が絵を画いていたのをうっすら覚えている。」「母はときどき詩を作っていたこともある。」(P.58～59)「父はリンカーンのように民主主義のよき模範であったと、私は確信しています。利益の追求とか、競争とか、私有財産の蓄積とかによっては、父の道徳的、社会的良心をまげることとは、決してできなかつた。彼は神の据え給う場所で、一つ一つにその全力を尽くし、なんの財産も残さずに死んで行った。それゆえ彼は、およそ世の父たるものがその子孫に伝うべき、最も貴重な遺産一立派な名声、忠実な生涯、高潔な模範、不滅の愛一を、われらのために残してくれたのである。」(P.62)＝「父母の教育」(つづく)

歴史の中の学園史

## 内村鑑三・賀川豊彦と 近江兄弟社

(その1) 発題者 中西 完次

これからとりくまれる学園百年史は学園の百年間の歩み・できごとを記録したものに終わることなく、世界や日本の歴史とのかかわりの中で学園がどう誕生し歩んできたのかをあきらかにすることによって、今後の学園にとって指針となりうる可能性をもっているといえる。地道で際限のない作業となるであろうがその骨子を以下のように考えてみた。

### 近江兄弟社学園と

### 世界史・日本史上の3つの接点

(第1期～第3期)

#### ①第1期：W. M. ヴォーリズの来幡 (1905年2月2日)をめぐって)

#### 帝国主義の時代のはじまりの中で

20世紀の幕開け、世界では帝国主義競争が本格化する時期に入る。

欧州列強は中国分割競争に入り、この動きに対し、1900年には清国での排外主義をとる義和団の乱がおこる。この乱では欧米人のキリスト教宣教

師も襲撃された。



マッセイホール（トロント）

中国やアジアでのキリスト教布教が困難になる情勢の中、マッセイホールでのアジア布教のよびかけに「神の声」を聞いたというヴォーリズの歴史的背景を考察する必要あり。

ヴォーリズが来幡することになる 1905 年は、日本が日露戦争を戦っている真ただ中であり、この年の 3 月には奉天会戦があり、5 月には日本海軍がバルチック艦隊を全滅させるという戦果をあげている。この日露戦争は圧倒的に強大なロシアのアジア進出に対しての祖国防衛戦争という性格をもちつつ、全体としてようやく辛勝にこぎつけた。しかし、この戦争の危うさ日本の戦力の限界は国民には正しく伝えられず、勝利を確信した国民による「日比谷焼打ち事件」に見られる暴走がはじまる時期でもあった。

明治維新から約 40 年間、司馬遼太郎が描く「坂の上の雲」の主人公たちの近代化への努力が一つの頂点をむかえた時期であった。しかし、一方でアジア・太平洋戦争での日本の敗戦にむかう 40 年間のはじまりの時期でもあった。要約すれば日本が侵略される国から侵略を開始する国への仲間入りと変身をとげて行く時期でもあった。

このような歴史の大転換点にあって、日本をめざしたヴォーリズがいただいていたものは、自分が行くところに「神の国」を建設するという理想の実現であったというのは大きな意味をもっていた。

## ②第2期 学園創立の時期

(1922 年学園創立をめぐって)

### 自由教育・大正デモクラシーの高揚の中で

近江兄弟社の創立者近江ウィリアム・メレル・ヴォーリズは来幡 4 年後の 1909(明治 42)年に東海道線の馬場(膳所)と米原に鉄道 YMCA を開設した。これは当時発達しつつあった鉄道に従事する鉄道青年を対象としており、キリスト教伝道のみならず勤労青年への教育をめざしたものと見えよう。ヴォーリズには当初から教育事業への思いがあったのである。それは当時「近江ミッション」と呼ばれた後の近江兄弟社の設立方針と思想をかかげた「近江基督教伝道団綱領」にもあらわれている。この「綱領」は正確な制定年代は不明であるが当初英文で書かれ後に日本語に改められたものである。現代では一部に「不適切な用語」が見られるが、1920 年(大正 9)の日本語綱領の七項目には「七、本団ハ禁酒禁烟、貞潔、思想ノ向上、結婚習慣ノ改革、体育衛生ノ進歩ヲ計リ、又貧民及特殊部落ニ対スル適当ナル運動ヲ含ム社会風教ノ改善ヲ計ル」とかかげられており、この中には青年教育への意思が認められる。

今日につながる近江兄弟社の教育事業のはじまりはヴォーリズ夫人となった一柳満喜子による 1920 年の清友園プレイグラウンドの開設である。これは放課後を無目的に過ごしている子どもたちの姿を見た満喜子が就学期の児童を対象としてはじめた今日の学童保育の先駆ともいえる事業であっ

た。その教育方法も「自治会組織によりて社会良心を作らんとす」をかかげ「互選により議長・副議長・書記 2 名をおき時々会合し自治組織の練習をなす」という児童の自治能力の高まりをはかるという先進的なものであった。これは満喜子一人の発想によるものではなく、広く社会の改良と貢献をめざしたウィリアム・メレル・ヴォーリズによる近江ミッションの事業目的の一翼を満喜子が担ったものといえよう。それは 2 年後には満喜子が専門に研究してきた幼児教育の実践の場としての清友園幼稚園の開設へと発展するのである。プレイグラウンド・清友園幼稚園が開設された 1920 年代は第一次世界大戦後の「教育熱狂時代」と呼ばれたように、世界的に新教育の運動が展開された時代であった。人間の善性を確信し真の世界平和を教育の力で実現しようとする気運が世界の各所にみられ、その世界的な教育改革の影響はわが国にも波及していた。樋口長市の『自学教育論』、河野清丸の『自動教育論』、手塚岸衛の『自由教育論』、さらに小原国芳の『全人教育論』などが発表され、成城小学校などの自由教育を標榜する私学が多く設立された。また、1922(大正 11)年には賀川豊彦による日本農民組合の結成、全国水平社の結成・日本共産党の結成などがあり、いわゆる大正デモクラシーが高揚した時期にあたる。まさに大正期は児童を人間として解放すること、すなわち「児童尊重」に立脚した児童の興味、自発性、自由を尊重した新しい教育の試みが展開された時期であった。近江兄弟社の教育事業もキリスト教信仰による情熱を原点としつつ、こうした時代の潮流のなかではじまったといえよう。

(つづく)



## 歴史的諸事件に対する 「湖畔の聲」論評目録

発題者 林 昌治

学園史編纂作業の 2014 年度の取り組みの一環として上記のような標題での作業を進めることになった。その内容について若干の説明をしたい。

当初の方針としては「歴史的諸事件」は「戦後の」に限定して作業を進める予定であったが、「戦前」や「戦中」も重要な期間という認識から標題のようになった。この標題から理解されるように目標的には近江兄弟社学園 100 年の歴史の過程とその帰結を考えようとするものである。そして、過去の歴史的な国内外の諸事件について近江兄弟社(学園)は何についてどのように反応したのか、また何について沈黙したのかを見ようとするものである。そのことで「近江兄弟社(学園)」の 100 年の歴史の中味が明確になり、本学園史編纂目的の基本精神ともいえるべき「100 年後の学園に存在意義と確信をもたらすものでなければならぬ」(学園討議資料Ⅷ、～過去・現在・未来～、P25)という視点を実現できると考える。

具体的な作業の方法としては近江兄弟社(学園)



『湖畔の聲』第一号

の機関誌ともいふべき『湖畔の聲』中に見られる国内外の諸歴史的諸事件に関連した記事を探ることである。そして、それは通史の参考資料になると共に当面の「資料集」編纂にも資すると考えている。

次に具体的作業の時代的区分であるが当面は、昭和 20 (1945) 年の「敗戦」を軸としてその前後の時代、昭和元 (1926) 年～昭和 63 (1988) 年の「昭和時代」(62 年間)

を見ていきたい。ただ、それには多大な時間と労力が必要と予想される作業内容、つまり『湖畔の聲』の総計 744 冊号の点検をすることになる。今後の具体的な作業の進捗状況によってその方法や取り組みの再検討をも考慮しなければならない。

また、作業の展開で予想される課題的なものとして「諸事件」の渾定や『湖畔の聲』中の記事のどのようなものを「目録」とするのか、等が考えられる。

作業もまだ端緒の段階ではあるが、たまたま無作為に『湖畔の聲』を見た中で、「近江兄弟社」にとって関係深い昭和 14 年の「宗教団合法」について、「感謝すべきである。少しも恐れて心配するに値らない」(『湖畔の聲』昭和 14 年 4 月号) とか昭和 16 年のヴォーリズの日本帰化についての同誌、昭和 16 年 7 月号のヴォーリズ氏の記事「今、私は、年来の帰化の希望を遂に完了したことを衷心より満足に思ひ、欣快に堪へぬものである。」ことなどが見られたことを紹介しておきたい。(了)

## 国際人教育の変遷 (その 1)

発題者 伊吹 章

### 【1】国際人教育とは

近江兄弟社学園の「国際人教育」がいかなるものであるか、についてはなかなか定義が難しい。源流は、ヴォーリズの近江八幡世界中心説やヴォーリズが生涯を通じて活動した YMCA 運動の精神にあるのかもしれない。

「近江キリスト教伝道団」の 8 項目の綱領のひとつに、「日本人も外国人も風俗習慣の別、国家の別、人種の別などを区別せず、共同生活をなし、完全に一致する団結を実現する。」という項目がある。(吉田悦蔵著「近江の兄弟」)

近江兄弟社学園の教育方針として、「国際人」という文字が最初に使われたのは、戦後の新制度のもとに発足した学校法人近江兄弟社学園の方針にあると思われる。「本学校法人は、イエス・キリストを模範とし、教育基本法および学校教育法

(私学の価値 一九六五・一二・七)

に従い、学校教育を行い、自己統制力のある自由



吉田悦蔵

人、独立自主の創造力に富む人、知性豊かな国際人を育成することを目的としております。」「国際人」を育成する教育ということで、「国際人教育」とまとめられているのであろう。

今のところ資料として確認できたのは、1960 年代に印刷された学園の広報用のパンフレットが一番古いものである。学園要覧で保存されている一番古い年号は 1968 年である。

この「目的」はずっと継承されているが、昭和 45 年 (1970 年) に近江兄弟社学園理事会の出した「基本構想に基づく具体案」の教育課題の項目に、宗教教育や芸術教育などと並べて次の記述がある。

#### (4) 国際人教育 (英語教育)

- a 英語教育に重点を置くため、すくなくとも第一学年では一学級を 2 分し、20 名に教師一人の指導を計画して、その徹底をはかること。
- b 外人教師の定着をはかり、生徒の外国留学 (長・短期) を制度化すること。
- c 教育機器の導入をはかり、施設設備の拡充を期すること。
- d 海外からの留学生を受け入れることを制度化する。

この具体案に示された課題とされた背景・原因があると思われる。英語教育については、このころ募集が落ち込んでいることから、低学力の生徒が増えてきていて英語科は苦勞していたにちがいない。外人教師については、県内の他の学校には皆無であったが、近江兄弟社学園は常に英語のネイティブスピーカーである外国人教師が採用されている実績はあった。ただし、2, 3 年で入れ替わっていたと思われる。留学に関しては、散発的に留学する生徒もいたようであるが、記録はない。受け入れについても、写真に写っている外国人生徒がいる。しかし、姉妹校制度はなかった。

しばしば引用されているのが、一柳満喜子の言葉である。

「彼等も目ざめて創造力と実行力を持ち、開拓の精神に生き、世界の到る所を我家となし得る人物となるべきだと思ふ。

私立学校、特にキリストに人類愛の精神を育む学校はこの意味においての使命があると信じる。外国に侵入して貪 (むさぼ) る人は世界の平和を破る。しかし、外国に行つて友を作り、その土地をうるおすことの出来る人、これは世界人類をつなぐ平和の使者なのである。私の夫、メレル・ヴォーリズは、日本の小さな八幡町に来てその使命を果し、ついに日本国民となつて、その一生を献げた。彼一人の献身は、八幡町を市とし、その住民の愛と信頼を身に受けて今日、近江兄弟社という社会事業団を遺業として世を去つた。これは活きた一例である。

彼は初等、中等の教育は田舎の単級学舎で受け、高原において自然に親しみ、想像力と創造力を活かし、開拓的な遊びに身と頭とを伸ばし、キリスト教の訓練で人類愛を身につけた者であった。この人類愛があつたので周囲の人の誤解にも迫害にも勝ち得たのであつた。

世界に進出する必要のある我が国民は、平和の使者として四海に広く動くことの出来る人物とならねばならない。ここに私立学校の使命は強く現われている。」一柳満喜子著「教育随想」より

(つづく)